
LIVING A PEN

ムテキング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L I V I N G A P E N

【Nコード】

N 8 5 1 7 H

【作者名】

ムテキング

【あらすじ】

もし、歴史上の人物が現代に生き返ったらどうなるんだ。そんなことが出来るはずがない……。だがそれを可能にするペンがあったとしたら、何かの間違いで手に入ったらどうする。実はそれを手にした男がいた。その男の物語である。

第一話

第1話 蘇生

「ああ、平凡だな」

男が呟いていた。その男の生活とは、朝起きて、学校に言って、夕方帰ってきて、テレビ見て、風呂入って寝る。休みに友達と遊んだり、これの繰り返しをしている。男の名前は、泉 佑樹。学生である。男は、疲れているので、ベッドに横になって、眠りだした。

「zzzz」

すると、どこからともなく女の声が聞こえてきた。

「そのままでもいいですか。貴方は、いまの生活に満足していますか」

「zzz・・・んっ」

泉は、まだ、意識が眠っている状態で答えた。

「・・・いや」

「そうですか。では、貴方に力を与えましょう」

泉は、ぼんやりしながら、答えた。

「・・・ああ」

「貴方には、人を生き返せるペンを置いときます。」

という声が聞こえなくなった。

それから、数時間後、泉は目を覚ました。泉は目を覚ました後、シャワーを浴びにいった。そして、部屋に戻ってくると、テレビを付けた。そのとき、速報で鉢他 比呂紀という株式会社の社長が死去という文字が流れた。男は、何かを思い出した。机の上にペンがあるのに気づいた。泉は、さっそく、死んだ社長の名前を紙に書いてみた。それから、テレビを見ていた。

「何も、起こらないな。」

泉は、昨日のことは、夢だと確信した。ペンも母さんが机の上にお

いたのだろうと考えた。そして、テレビを消して、今日は日曜日なので、本でも買いに出かけた。デパートの本屋に向かっている途中、電気店の近くを通ると、ニュースが流れていた。そのニュースの内容とは死んだはずの鉢他 比呂紀社長が生き返ったという内容だった。泉は、そのニュースを見るなり、本屋に行かず、家に帰った。泉は驚愕していた。

「マジか、俺が生き返したのか、いや、たまたまなのかもしれない。」

部屋に戻って、ペンを確認しようと思い。部屋の扉を開けた。

「よっ」

と翼のはえた女が泉の部屋にいた。

「……誰だ」

と少し戸惑った後泉は女に向かっていった。

女は笑顔で答えた。

「君にペン（力）を与えたものとおこうかな」

泉は、考えていた。この女がこの力を与えてくれたのか。こいつは使えるなと泉は考えていた。そのとき女が話しかけて来た。

「驚かないね。君」

「いや、驚いているよ。だが、よく来てくれた。少し、聞きたいこともあるのでね。」

泉は、ペンの使い道のことを女に聞いた。それから、30分後……

「……なるほどね。簡単に言うところ、名前、認識、時間、年齢をこのペンで書いたら、そのものが生き返るのだな。例えば、名前だけなら、他の項目はかつてに決まるんだな。」

「だいたい、そんな感じかな」

女はうなづいていた。

「それは、人間以外にも使えるのか。例えば恐竜とか」

泉は質問をした。

「たぶん、生物だったら使えると思うよ」

女は感心していた。

「けど、よくそんな使い方を思いつくね。君人間でしょう。人間が絶滅するかもしれないよ。」

泉は笑っていた。

「ははは、人生に退屈していたんだよ。ラッキーだったな。面白いものが手に入った」

女は泉に問いだした。

「ねえ。どうして君は、私の事や、どうして、自分が選ばれたとか聞かないの」

泉は答えた。

「興味ないね。俺に今必要な情報は、いや、興味があるのは、このペンだけだ。例え、君の事を知っても、どうでもいいことだ。」

「そんなものかなー」

「そんなもんだ」

泉はペンで書き始めた。内容は、アメリカのニューヨーク、ティラノザウルスと。

「ティラノザウルスってなに」

「恐竜さ。さてどうなるかな」

ニュースで、ニューヨークに恐竜が出現とパニックになっていた。

男はそれを確認すると、満足そうにわらっていた。次に女に聞いてみた。

「おい、これは、生き返れる場所はどんな場所でもいいんだな」

「うん、そのペンで書いた所にいけるよ」

「わかった。次に生き返るときは、服とかも身に付けているんだな」

「死んだときに着用していたものならいけると思うよ」

「そうか、わかった。」

泉は不敵な笑顔をしていた。

その日から泉の行動は一気に躍進した。

泉はペンの力を利用して、まず金を手に入れようとした。まず、外国のスイス銀行に講座を作った。そして、外国のサイトで、ホームページを開いた。もちろんすべて英語である。その行動を女は見ている。

「おい、女、いつまで俺の回りにいるんだ」

女は空中に浮きながら答えた。

「気にしない、気にしない」

「わかった。」

泉はその後なにもしゃべらず、ホームページを完成させていた。女はそれは、なにをしているのかと聞いていた。

「何をしてるの」

泉は無視して、作業を進めていた。

「・・・・・・・・・・」

「ねえねえ、何してるの」

泉は無視して作業を進めている」

女は泉の頭をもぐらたたきのハンマーで叩いた。

「ピコ、ピコ、ピコ」

女は叩きながら効果音を自分で出していた。

泉はだんだんと腹がたつてきてとうとう言い返した。

「おい、この女さあまつきから何しやがる。気にしなくていいんだろ」

女はふて腐りながら、ベッドに転がっていた。

「うざぎはね、さみしくなると死ぬんだよ。それに私の名前はアメトイナ。職業は悪魔」

泉は言い返した。

「あつそ」

「冷たいなー。その力なくそうかなー。それでもいいのかなあ」
泉はこの女うざつてえなーと思っていたがここは我慢と自分に言い聞かせた。

そして、一呼吸して、女に言った。

「わかったよ、何が知りたいんだ」

「・・・女じゃないよアメトイナ。名前で呼んでくれなきゃその力なくそうかな？」

「ちっ、アメトイナ」

「ちい、って聞こえたよ、あれ、今ちって聞こえたよ。気づついた。心に穴があいたよ。悪魔なのに。謝って、謝って欲しいな。」

泉はこいつはほんまにうざいと思いながら、めんどくさいので、とりあえず謝った。

「ごめん」

「仕方ないな、許してやるよ、ところで今、なにしてるの」

「ああ、これで一儲けしようと考えたんだ。この機械はパソコンというんだ。」

「へーこれがパソコンか」

泉はアメトイナにこれから何をするかを説明した。

「わかったか」

「うん、この機械で、人、生物を生き返すと宣伝して、依頼がきたら、振込みを確認してから、生き返すんだね」

「ああ、そのとおりだ、世の中には生き返したい人はかなりの数がいるからな」

泉は、活動を開始して、一週間が過ぎた。最初は半信半疑の人ばかりだが、一度生き返すと、一気に依頼が殺到した。男はその活動で55兆円を手に入れた。

「さて、これで資金はたまった。」

「次は何するの。」

「そうだなあ。戦争かな」

それから数カ月後、泉はその日、自分を世間的に自分の存在を殺した。

TO BE コンテニュー・・・

第二話 蘇り（前書き）

さあ。 10月になってきました。 こん棒と相棒はよく似ています。
さあ、 よんでください。

第二話 蘇り

金があればなんとかなるものだ。なと泉は思っていた。家族、友人など今の俺には関係ない。泉は世間的に死ぬ前に、島を一つ買った。そこで大規模な工事をし、基地というべきものを建てた。最新の設備などすべて取り入れた建物であった。野菜の人工栽培、水の貯水、家畜の飼育などもやっており、地球が滅びない限り永遠に生きられる。

「すごいね。ここ」

「まあな」

泉も満足している。

「ところでどうして戦争を起こすの」

アメトイナは疑問に思っていた。

泉は答えた。

「別に戦争をしたいわけじゃない」

「じゃあ、なんで」

「まあ、聞けよ。俺はな、人の本性が見たいんだよ。例えばさ、ジヤパンという国があるとするだろ。その国では、警察がいるんだ」

「警察？」

「まあ、簡単いえばルールを破ったものを取り締まる人間だ」

「へー。偉いんだね」

アメトイナは感心していたが、泉が反論した。

「偉くなんかないよ。ただその国の中じゃ力があるんだ」

「じゃあ、みんなルールを守っているの？」

「まあ、大体の人間はおとしく守っているよ。けれど、それは罰が怖いんだ」

「ペけ？」

泉はあきれていたが、答えた。

「違うよ、罰だ。うーんまあいつてみたらお仕置きかな」

「例えば」

アメトイナは興味があるようだ。こいつはSなんだろう。

「まあ、あるせまい場所に閉じ込められるとか、死刑とかだな」

「それじゃ、みんな悪いことをしないからいいんじゃないの？」

「まあ、そういう風にとれることもあるさ。けどな、その力を利用してやるヤからもいるんだよ。おかしいだろ。正義のヒーローが悪いことしている」

「ふーん」

「まあ、警察などは井の中の蛙つてことだ。まあ、人間の本性をみるためには、戦争を起こし、秩序をなくすんだよ」

「どうやって？」

泉はペンを取り出した。

「このペンを使っているうちに面白いことを発見したんだ」

「面白いこと？」

「ああ、このペンを使って生き返すことができるのは知っていると思うが」

「うん、知ってるよ」

「そのあと、生き返した後、操れることが分かったんだ。これを使っただな。戦争を起こす」

「操れる事は知ってますよ。それでどうするの」

「……じゃ、ペンの説明の時に教えてくれたらよかったんでは」

眉をゆがめながら泉は言った。

「うん、忘れてたし、聞かれなかったから」

「……ほかに伝え忘れたことはないか」

「……うん。たぶん」

あいまいな返事だった。

「まあいい、それから、何度もいつているだろ。人間の本性を見るんだよ」

「それで、どうす、んっ」

泉はアナトイナを黙らすため唇を奪った。

「静かにしてろ、お前は俺の物だ」

アメトイナはぼーっとしながら、うなずいていた。

「黙って見てろよ。さあ、これから戦争の開始だ」
ゲーム

泉とアメトイナが島に移動しているころ、世間では死人が生き返る奇跡が起こっていることが

ニュースになっていた。

キャスターの男が話していた。

「ニュースです。世界では、死人が生き返るという奇跡ともいえる現象がインフルエンザ見たく流行っている様子です。こちらの事件のはじまりはニューヨークでの怪奇事件、ティラノザウルスが現れたという事件との関係性があるようです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8517h/>

LIVING A PEN

2010年10月20日11時12分発行